

**大学入学共通テストの実施
北海道大学と東北大学が連携協定を締結
新渡戸カレッジの新しいロゴマークが決定**





北海道大学と東北大学が連携協定を締結



北海道大学「サイエンスフェスタ2023」を開催

全学ニュース

- 1 大学入学共通テストの実施
- 2 北海道大学一般選抜の志願状況
- 3 事務局が「災害等危機対策本部設置訓練」を実施
- 4 北海道大学と東北大学が連携協定を締結
- 5 北海道大学「サイエンスフェスタ2023」を開催
- 6 現代日本学プログラム課程「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催
- 7 新渡戸カレッジの新しいロゴマークが決定
- 8 北海道大学交流デー（ドイツ連邦共和国ブレーメン大学）を開催
- 9 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 12 令和5年度北海道大学・旭川工業高等専門学校技術職員相互交流研修を開催
- 13 第1回北海道大学コアファシリティシンポジウムを開催
- 14 第7回化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）国際シンポジウムを開催
- 15 モンゴル・ウランバートルにて開催されたDXビジネスコンテスト「DXCUP2024」に本学学生が参加
- 16 スポーツ×アントレプレナーシップ教育 野球教室を長沼町で開催
- 17 「アントレまちなか留学」：異文化共生とアントレプレナーシップを促進する取組みを実施
- 18 「支援機関向け知財ナレッジ強化研修」及び「学内向け利益相反セミナー」を開催
- 19 「2024年北海道大学・マサチューセッツ大学アマースト校高分子工学にかかるバーチャルシンポジウム」を開催
- 20 エコサイエンス体感イベント「カーボンクエスト 炭素になって、さあ冒険だ！」を開催
- 21 国連大学チリツィ・マルワラ学長が表敬訪問 特別講演を実施
- 22 大学院生向けプレゼンテーションスライドセミナーTips for designing your presentations: What I learned from scientists abroadを英語で開催
- 23 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 8名の研究者が講義を実施



新渡戸カレッジの新しいロゴマークが決定



第7回化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）国際シンポジウムを開催

部局ニュース

- 26 歯学部でソウル大学校とのジョイントシンポジウム分科会を開催
- 27 FD研修「工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センター安全保障輸出管理FD研修会」を開催
- 28 メディア・コミュニケーション研究院が「メディア・ジェンダー・教育と日中関係」で公開講座
- 29 スラブ・ユーラシア研究センターでメルボルン大学とのジョイントセミナーを開催
- 30 「森のたんけん隊2024冬」を開催
- 31 北方生物圏フィールド科学センターと様似町が包括連携協定を再締結

お知らせ

- 32 過半数代表候補者の決定

表敬訪問 33

人事 34

- 35 新任教授紹介

訃報

- 36 名誉教授 神谷 正男 氏



「アントレまちなか留学」：異文化共生とアントレプレナーシップを促進する取組みを実施



国連大学チリツィ・マルワラ学長が表敬訪問 特別講演を実施

表紙：大学入学共通テストの実施（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景④ 総合博物館（北10条西8丁目）

■全学ニュース

大学入学共通テストの実施

令和6年度の大学入学共通テストが、1月13日（土）及び14日（日）に全国一斉に実施されました。

本学においても、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を置き、延べ約1,100人の教職員の協力により、無事終了しました。

全国の志願者は、前年度より20,667人減少し、491,914人でした。

本学が担当する試験場（水産学部試験場、藤女子大学試験場を含む）の志願者数は、昨年度より479人少ない3,723人で、各試験場（会場）の受験状況は次のとおりです。

（学務部入試課）

令和6年度大学入学共通テスト受験状況

試験場（会場）名・志願者数	日 程		1日目										2日目								
	教 科		地理歴史、公民		国語		外国語【筆記】		英語【リスニング】		英語【リスニング】再開テスト		理科①		数学①		数学②		理科②		
	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	
農学部会場	371	363	8	365	6	365	6	364	7			0	371	365	6	365	6	364	7		
人文・社会科学総合教育研究棟会場	568	533	35	542	26	549	19	547	21			0	568	546	22	543	25	543	25		
理学部会場	403	379	24	383	20	384	19	384	19			0	403	379	24	379	24	379	24		
工学部会場	388	372	16	376	12	375	13	374	14			349	39	355	33	349	39	0	388		
北海道大学試験場 高等教育推進機構 A会場	371	197	174	297	74	285	86	278	93			104	267	137	234	50	321	0	371		
高等教育推進機構 B会場	468	424	44	429	39	428	40	426	42			385	83	385	83	377	91	0	468		
保健科学研院会場	358	276	82	301	57	299	59	296	62			157	201	175	183	151	207	130	228		
高等教育推進機構 N会場	11	9	2	10	1	10	1	10	1			4	7	10	1	10	1	5	6		
藤女子大学試験場	500	452	48	457	43	458	42	458	42			406	94	405	95	384	116	0	500		
札幌地区 小計	3,438	3,005	433	3,160	278	3,153	285	3,137	301			1,405	2,033	2,757	681	2,608	830	1,421	2,017		
		87.4%	12.6%	91.9%	8.1%	91.7%	8.3%	91.2%	8.8%			40.9%	59.1%	80.2%	19.8%	75.9%	24.1%	41.3%	58.7%		
北海道大学水産学部試験場	285	252	33	254	31	254	31	253	32			18	267	226	59	219	66	215	70		
合 計	3,723	3,257	466	3,414	309	3,407	316	3,390	333			1,423	2,300	2,983	740	2,827	896	1,636	2,087		
		87.5%	12.5%	91.7%	8.3%	91.5%	8.5%	91.1%	8.9%			38.2%	61.8%	80.1%	19.9%	75.9%	24.1%	43.9%	56.1%		

※欠席者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

北海道大学一般選抜の志願状況

令和6年度の本学一般選抜の志願者は、前期日程5,196名、後期日程4,286名、合計9,482名となり、昨年度と比較すると326名減少し、倍率は4.0倍となりました。

入学試験日は、前期日程が2月25日（日）・26日（月）、後期日程が3月12日（火）となっています。

各学部・学科等の志願者数は、次のとおりです。

(学務部入試課)

令和6年度北海道大学一般選抜志願者数

日程	学部・学科等	募集人員	志願者数	倍率	第1段階選抜 予告倍率	前年度 志願者数	前年度 倍率	総合型選抜 の欠員	変更後の 募集人員	変更後の 倍率				
前期日程	総合入試	文系	95	330	3.5	4.0	350	3.7	2	97	3.4			
		理系	数学重点選抜群	133	350	2.6	4.0	463				3.7		
			物理重点選抜群	239	707	3.0	4.0	656				2.9		
			化学重点選抜群	240	569	2.4	4.0	612				2.7		
			生物重点選抜群	169	411	2.4	4.0	417				2.5		
			総合科学選抜群	253	616	2.4	4.0	443				1.9		
	計	1,034	2,653	2.6		2,591	2.6							
	学部別入試	文学部	118	295	2.5	4.0	330	2.8	4	89	3.3			
		教育学部	20	46	2.3	4.0	55	2.8						
		法学部	140	327	2.3	4.0	363	2.6						
		経済学部	140	346	2.5	4.0	328	2.3						
		医学科	医学科	85	295	3.5	3.5	291				3.4		
			保健学科	看護学専攻	60	133	2.2	5.0				148	2.5	
				放射線技術科学専攻	28	119	4.3	5.0				83	3.0	
				検査技術科学専攻	25	78	3.1	5.0				106	4.2	
				理学療法学専攻	13	44	3.4	5.0				34	2.6	
				作業療法学専攻	10	30	3.0	5.0				74	7.4	
小計		136	404	3.0		445	3.3							
計	221	699	3.2		736	3.3	34	255	2.7					
歯学部	38	123	3.2	6.0	149	3.9	3	41	3.0					
獣医学部	20	93	4.7	6.0	95	4.8	9	114	2.5					
水産学部	105	284	2.7	4.0	287	2.7								
合計	1,931	5,196	2.7		5,284	2.8	48	1,979	2.6					
後期日程	学部別入試	文学部	37	356	9.6	6.0	333	9.0	3	6	13.5			
		教育学部	10	79	7.9	10.0	130	13.0						
		法学部	40	476	11.9	6.0	516	12.9						
		経済学部	20	236	11.8	10.0	231	11.6						
		理学部	数学科	10	134	13.4	6.0	110				11.0		
			物理学科	3	81	27.0	6.0	97				32.3		
			化学科	20	173	8.7	6.0	182				9.1		
			生物科学科 生物学専修分野	10	108	10.8	6.0	83				8.3		
			生物科学科 高分子機能学専修分野	2	24	12.0	6.0	24				12.0		
		地球惑星科学科	5	93	18.6	6.0	74	14.8				2	4	6.0
		計	50	613	12.3		570	11.4				6	56	10.9
	薬学部	24	232	9.7	6.0	347	14.5	2	31	7.9				
	工学部	応用理工系学科	29	246	8.5		381				13.1			
		情報エレクトロニクス学科	38	381	10.0		458				12.1			
		機械知能工学科	25	291	11.6		231				9.2			
		環境社会工学科	47	468	10.0		376				8.0			
	計	139	1,386	10.0		1,446	10.4	7	54	8.7				
農学部	53	400	7.5	6.0	468	8.8	9	148	9.4					
獣医学部	15	115	7.7	6.0	105	7.0								
水産学部	50	393	7.9	6.0	378	7.6								
合計	438	4,286	9.8		4,524	10.3	15	453	9.5					
総計	2,369	9,482	4.0		9,808	4.2	63	2,432	3.9					

注1: 「倍率」は、小数第2位を四捨五入。

注2: 「第1段階選抜予告倍率」は、当初募集人員に対するもの。

注3: 総合入試理系の「前年度倍率」は令和5年度の当初募集人員に対するもの。

事務局が「災害等危機対策本部設置訓練」を実施

災害等危機対策本部設置訓練を1月16日（火）に事務局で実施しました。

本訓練は、平時における大会議室のレイアウトから、災害等危機対策本部（以下「対策本部」）へのレイアウト変更、ネットワーク環境への切替等を経験することによって、災害発生時に迅速な対策本部の設置・運営に必要な対応力を身に付けることを目的とし、事務局各課（室）の職員37名が参加し

て行われました。

進行役の総務課職員による指示の下、対策本部を構成する各班に分かれ、レイアウト変更、電話設置、ネットワーク環境接続、電話回線及びネットワーク通信テストなどの訓練が行われました。

訓練終了後、災害等危機対策本部総括副本部長である行松泰弘理事から、1月に発生した能登半島地震の状況を

踏まえ、実際に地震等の災害が発生した場合には、限られた人員のなかで対応する必要があり、そのためには、多くの職員が訓練を積むことが重要であるとの講評がありました。

北海道大学では、今後も防災意識の向上に資する訓練等を継続的に実施します。

（総務企画部総務課）



災害等危機対策本部設置訓練の様子



講評を行う行松理事

北海道大学と東北大学が連携協定を締結

本学と東北大学は、両大学のそれぞれの特色及び教育研究資源を活かし、相互に連携及び協力することで、有為な人材の育成や教育の充実、研究の推進に寄与することを目的として、1月17日（水）に連携協定を締結しました。

本学と東北大学はこれまで、基本理念とビジョンにおいて共通点を持つ関係にありました。本学は建学以来培ってきた四つの基本理念（フロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視）において、東北大学は三つの建学の理念（研究第一、門戸開

放、実学尊重）において、それぞれ「実学」を重視・尊重することを掲げているほか、両大学が近年策定した中長期のビジョンにおいて世界を見据えた社会価値の創造を目指している点も共通しています。

更に、両大学の所在する北海道・東北地域は、我が国における喫緊の課題の一つである半導体分野における産業基盤整備に向けた動きが急加速しており、半導体分野における人材育成において重要な役割を担っているという共通点もありました。

このような状況を踏まえ、両大学は、教育・研究・産学連携・社会貢献といった幅広い事項について、これまで以上に緊密に協力すべく、連携協定を締結したものです。

両大学は初めに、半導体に関する教育・研究での連携を広げていく予定で、eラーニングの共有化をスタートさせることで半導体分野の人材育成に取り組めます。

（総務企画部総務課、企画課）



署名の様子



締結式の様子

北海道大学「サイエンスフェスタ2023」を開催

12月16日（土）、17日（日）の2日間、大学院教育推進機構では北海道との主催、札幌市との共催で「サイエンスフェスタ2023」を開催しました。

昨年度、チ・カ・ホ（札幌駅前通地下広場）を会場として初めて実施した本イベントですが、今年度は規模を拡大し、紀伊國屋書店前会場、サッポロファクトリー会場を加えた計3会場で、一般市民を対象としたワークショップやステージイベントなど、多彩なプログラムが展開されました。

本イベントは、学生の活動や研究成果が社会に還元される姿を一般市民にアピールすること、次世代を担う小中学生及び高校生に“サイエンス（科学技術）”への興味を醸成し、新たな学

びや気づきを生む機会を提供することを目的としています。

イベントの中心企画である「研究成果でSDGsに貢献する発表会」では、博士課程学生が、「自身の研究テーマがどのように社会に還元され課題解決に繋がるのか」について、一般市民の方にも分かりやすく説明したポスターを作成し、展示しました。当日は学生がポスターの横に立ち、来場者との対話を楽しむ姿も多数見られました。来場者は、“大学院”をより身近に感じることができ、優れたポスターを選出するコンテストにも759名の方に投票していただきました。

また、ワークショップの実施団体として、本学や東京大学発のスタート

アップ企業や市内高等学校、NPO法人など分野を超えた参加があり、幅広い企画の提供を可能としました。申し込み開始から数日で定員を満した企画も多数あり、参加者からも高い評価を得ることができました。

イベント終了後には、出展者として参加した博士課程学生のメディア掲載をはじめ、「研究成果でSDGsに貢献する発表会」が学外イベントへ出展を依頼されるなど、一層の波及効果が期待できます。今後は、学部学生の来場者増も含め、イベントの更なる活性化を目指し、次年度以降の継続開催を目指していきたいと考えています。

（学務部学務企画課大学院教育改革推進室）



「SDGsに貢献する発表会」の様子



北大短角牛や北大トラウトなど、多数の北大ブランド商品も販売された



北大発スタートアップ企業「Floatmeal株式会社」によるワークショップの様子



「未来社会の開拓者よ、大志を語れ」がテーマのステージイベント

現代日本学プログラム課程 「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催

現代日本学プログラム課程（以下、「現プロ」）では、令和5年度2学期に、対面による「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催しました。

本シリーズは、学内外の日本研究の専門家を招き、現代日本学の最先端について学ぶことを目的とし、主に現プロ学生を対象として開催しています。

前学期に引き続き石見 禎講師（高等教育推進機構国際教育研究部現代日本学ユニット）がコーディネーターとなり、日本研究をテーマとして、多彩な講師による講演を8回にわたり実施しました。本講演の一部は学外の一般参加者にも公開され、学内外からのべ200名以上が出席し、現代日本学の諸相を学びました。

現プロでは令和6年度以降も、現プロ学生のみならず、学内外からの参加者の現代日本への学びをさらに深め実学の涵養を目指し、より一層魅力的なゲストレクチャー及びワークショップを実施する予定です。

（学務部教育推進課）

講演内容及び登壇者

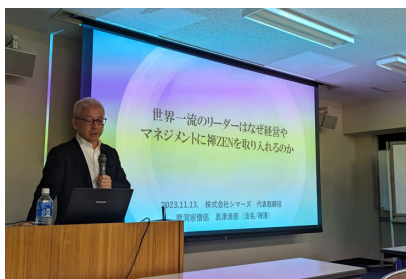
- ・10月6日（金） 「アラビア語と日本語の架け橋：日本語研究におけるイスラム金融の研究」
ハシヤン・アンマール准教授（立命館大学）
- ・10月18日（水） 「第二次世界大戦を扱うアニメにおける『犠牲者意識』とは」
アルト・ヨアヒム特任助教（国立歴史民俗博物館）
- ・10月20日（金） 「世界で最も寛大な人々：日本社会の特徴と日本の主権」
10月21日（土） 瀬端孝夫名誉教授（長崎県立大学）
- ・11月13日（月） 「世界一流のリーダーはなぜ経営やマネジメントに禅ZENを取り入れるのか」
島津清彦代表取締役（株式会社シマーズ）
- ・11月17日（金） 「ジェンダーと日本政治」
杉田弘也教授（神奈川大学）
- ・12月1日（金） 「観光業における海外観光客とスタッフ間におけるコミュニケーションダイナミズム」
渡辺幸倫教授（相模女子大学）
- ・12月8日（金） 「国連食糧計画と日本/国際機関で働くとは」
近藤篤史事務所長（WFP国連世界食糧計画ミャンマー・ラカイン事務所）
- ・12月22日（金） 「日本の安全保障環境」
12月23日（土） ウォレス・コオリ准教授（神奈川大学）



ハシヤン准教授（立命館大学）



アルト特任助教（国立歴史民俗博物館）



島津代表取締役（株式会社シマーズ）



近藤事務所長（WFP国連世界食糧計画ミャンマー・ラカイン事務所）

新渡戸カレッジの新しいロゴマークが決定

このほど、新渡戸カレッジの新しいロゴマークのデザインをカレッジ生より募集し、決定しました。

応募作品の中から選ばれたのは、本田みりさん（総合教育部1年）のデザインです。

作品は、ノブレス・オブリージュをイメージして、新渡戸稲造の眼鏡に、勝利や栄光の象徴であり、月桂冠にも

使われるローリエ（月桂樹）を組み合わせたデザインとなっています。SDGsの17色を用いて描いたローリエの蕾は、将来グローバルリーダーとして活躍することを目指して新渡戸カレッジで学ぶ学生を表現しています。

また、表彰式を1月11日（木）に行いました。

式では、弼 和順新渡戸カレッジ副

校長から本田さんに表彰状が手渡されました。続いて、審査を担当した新渡戸カレッジ運営会議広報・システム専門委員会広報・ホームページ部会を代表して内田治子部会長から審査過程についての説明がありました。

（学務部教育推進課）



新渡戸カレッジ新ロゴ



弼副校長より表彰状を手渡される本田さん



左から弼副校長、本田さん、内田部会長

北海道大学交流デー（ドイツ連邦共和国ブレーメン大学）を開催

12月11日（月）、12日（火）にドイツ連邦共和国のブレーメン大学にて、大学間交流協定校との共同教育・研究及び学生交流の更なる促進を目的とする「北海道大学交流デー」を開催しました。ブレーメン大学とは、2010年2月に大学間交流協定を締結しており、同大学での交流デーは2014年に行われたから、2度目の開催となります。

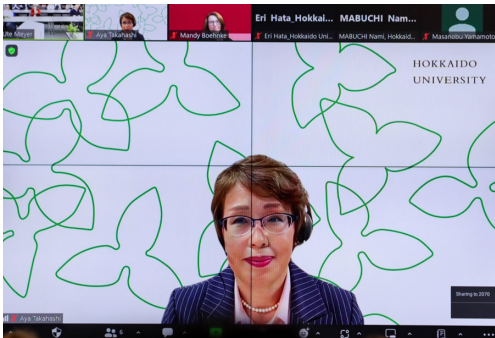
開会式では高橋 彩理事・副学長とブレーメン大学のマンディ・ボーンケ副学長から挨拶及び各大学の概要等の説明が行われ、その後、両大学からの贈呈品が交換されました。開会式終了

後、低温科学研究所の福井 学教授と電子科学研究所の中垣俊之教授がそれぞれ代表となる分科会に分かれ、2日間に渡り、雪氷学、微生物学、古気候学、海洋物理学、極域及び海洋科学、生物物理学の6つの分野についてワークショップが行われました。本学からは、低温科学研究所、電子科学研究所、理学研究院、地球環境科学研究院、水産科学研究院、北方生物圏フィールド科学センター等から約30名の教員と大学院生が参加し、自身の研究内容について発表しました。また、同日程では教員と事務職員によって、大学における

ダイバーシティやSDGs、IUCA（気候変動に関する国際大学連盟）をテーマとしたミーティングがあり、活発な意見交流が行われました。本交流デーには、2日間で約100名の参加があり、盛会のうちに終了しました。

今後も国際連携機構では、協定校との連携拡大を促進し、教員や学生の相互交流などの関係を強化していくほか、優秀な留学生を本学へ受け入れる活動を展開していきます。

（国際部国際連携課）



オンラインで参加した高橋理事・副学長



ワークショップで最終発表を務めた水産科学研究所の酒井隆一教授



ミーティングの様子（左から、統合URA研究マネジメントステーションの岡田直資主任URA、理学研究院国際化支援室の河村 裕室長、ダイバーシティ・インクルージョン推進部の長堀紀子特任教授）



コーヒーブレイクでの交流の様子

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をする事としています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

【北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）情報】

基金累計額（12月31日現在） / 46,469件 6,916,619,023円

ご寄附状況

12月は2,153件73,242,843円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

医療法人社団直江クリニック、医療法人社団栗栖皮膚科泌尿器科、医療法人社団憲仁会牧田病院、株式会社小鍛冶組、医療法人徳洲会札幌東徳洲会病院、一般財団法人札幌陸上競技協会、サムワン、Jeisys Medical Japan株式会社、株式会社知床グランドホテル、泉工医科工業株式会社、大同特殊鋼株式会社、町立中標津病院、医療法人溪仁会手稲溪仁会病院、株式会社ドーコン、医療法人寧和会、株式会社橋本川島コーポレーション、株式会社濱野建材店、本間塗装株式会社、株式会社牧野フライス製作所、峰村内科クリニック、医療法人讚生会宮の森記念病院、医療法人社団越前谷脳神経クリニック

寄附者ご芳名（個人）

AFM SaifulAlam	合川 正幸	藍 洋一	青井 良平	青木 俊介	青柳 良隆	赤平 幸郎	阿部 雅史
新垣 雅人	安齋 洋一	飯島 尚	池浦 惇平	池田 隆	石井 哲夫	石井 仁	石垣 隆弘
石丸 昌宏	泉 典洋	市坂 有基	伊藤 和生	伊藤 広一	伊藤 大貴	伊藤 雄三	稲葉 英昭
猪股 路子	今井 晋	入澤 秀次	岩井 愛	上田 諭	上田 雅敏	上野 正彦	内村慎・知榮子
梅本 由佳	縁記 和也	遠藤 公憲	及川 道夫	大居 健二	大石 博昭	大川 征治	大澤 恵利
大澤 國雄	大城 純市	太田 正敏	大塚 宣樹	大原 正範	大村 丈史	岡 國太郎	沖崎 遼
奥芝 義人	奥村 和久	奥山 茂樹	小田原一史	小野 善平	小原 大和	加賀屋誠一	角田 登
加地 浩	加藤 敏光	加藤 伸康	加藤 裕貴	金川 眞行	金子豊三郎	金田 亮平	上小鶴 博
川上 博史	川崎 晶司	川島 純一	川手 雅美	河本 充司	菅野 一敏	菊地 英毅	木滝 俊郎
衣川 暢子	KIM DAEIL	木村 祐介	金龍 之緒	草野 徳夫	窪田 武浩	久保 良彦	倉田 博司
栗原 誠治	黒川 輝世	小池 章一	上月 浩	小崎 完	小菅 充	小辻 英二	小林 賢人
小林 俊郎	小松 和志	小室 八郎	権平ひつじ	近野 敦	近 祐次郎	齊藤 晋	齋藤 久
斎藤瑠衣子	嵯峨 博文	坂本 大介	坂本 信行	崎元 大志	笹 彩子	笹 貴彦	笹村 裕二
佐藤 紘一	佐藤 大介	佐藤 弘次	佐藤 眞	佐藤 正治	佐藤美恵子	佐藤 太裕	佐野 公昭
澤田 克彦	三升畑元基	三分一博基	塩満 正哉	志済 聡子	志田 裕子	篠田 好彦	柴田 珠江
渋谷 正人	嶋岡 浩嗣	島倉 良成	嶋田 誠	清水 研一	白尾 誠二	新宮 康栄	神保 重孝
菅原 新也	杉江 和男	杉本 聡	鈴木 貴之	鈴木 充	清治 真人	瀬川 章	瀬戸 務

瀬名波栄潤	仙丸 直人	高島 秀聡	高瀬登志彦	高橋卓二郎	高橋 美宏	高柳 涼	瀧 基彦
武井 徹	竹内 佑介	竹田洋一郎	竹本 泰朗	田澤 皓	立野 正敏	田所厚一郎	田中 和裕
田中 佐織	田畑 昌祥	田淵 文子	丹 信義	千葉 豪	千葉 繁生	辻井 正久	土家 琢磨
出口 達也	寺澤 陸	照屋 均	豊田 威信	鳥潟 肇	中川 秀哉	中田 大地	中谷 藤士
中野 篤	中畠 孝幸	中町 昭道	中村 和正	中村 克宏	中村仁志夫	西田 雄二	新田 秀彦
庭野 陽樹	沼田 哲男	子野日政昭	根本 叔治	野口 豪	野田扇三郎	橋本 武志	花田 秀一
春 公一郎	番場 堅	福島 知之	福士 幸治	福永 悟郎	藤澤 裕子	藤嶋 正紀	藤野 勝裕
藤原 晶	古川夕里香	古崎 章	逸見 勝亮	北條 紘次	星 貞雄	松井 耕二	松平 範慶
松田 俊己	松永 聖弘	松原 謙一	松元 和幸	松本 大蔵	松本 範雄	松本 嶺	真屋 幹雄
丸岡 隆之	三浦 勝也	三浦 大平	三木 證永	南田 大朗	三原 達美	宮田 知己	宮田 信幸
村井 英樹	村上 明	村上 泰一	村瀬徳啓充	村瀬 亮太	森下 亜紀	森山 友雄	山口 悦郎
山崎滉一郎	山下 裕久	山田 哲也	山本 真	湯浅 資之	横山 考	吉川 実	吉田 敬貴
吉田 和浩	吉田 広志	吉田 洋	米山由美子	若狭 哲	和田 宏	渡邊 政義	渡部 靖憲
渡部 克将							

<感謝状の贈呈>



株式会社日立製作所様（令和5年12月13日）

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年8～9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff>

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

（社会共創部広報課）

令和5年度北海道大学・旭川工業高等専門学校技術職員相互交流研修を開催

11月27日（月）～12月1日（金）と12月11日（月）～12月15日（金）の日程で令和5年度北海道大学・旭川工業高等専門学校技術職員相互交流研修を開催しました。

本研修は、本学と旭川工業高等専門学校（以下、「旭川高専」）の技術職員を相互に派遣することにより、技術職員のスキルアップ及びマルチスキル獲得の機会を創出するとともに、技術職員が有するスキルや情報の共有を図り、両機関の連携を強化し、技術職員の交流を促進することを目的に、北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム、マルチスキル人材育成プロジェクトの事業として行われました。

両機関それぞれ受講者を募集し、旭川高専からは分析・実験実習系と情報系の技術職員各1名の計2名が、11月27日（月）～12月1日（金）の日程で、本

学において研修を受講し、本学からは工学研究院工学系技術センターの技術職員2名が、12月11日（月）～12月15日（金）の日程で、旭川高専において研修を受講しました。

本研修は、事前に講師を担当する技術職員と受講者の間で打合せを行い、受講者が特に興味のある専門分野を重点的に学習する内容で行われ、さらに施設見学や業務発表会なども盛り込み、充実した研修となりました。また両機関の技術職員が交流を深めるための懇親会も行われ、受講者は積極的に情報交換を行いました。

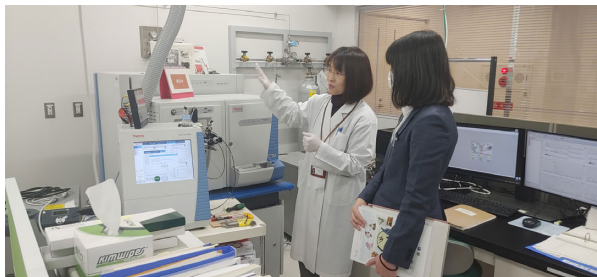
旭川高専の受講者からは、専門分野の研修において、深い知識を学ぶことができ、大変有意義であったこと、また、同じ専門分野の技術職員だけではなく、幅広い分野の技術職員と交流することができ、今後の業務において、

協力・連携していく上で、大変意義のある研修であったという感想が聞かれました。

また、本学の受講者からは、大学と高専それぞれの特色の違いを体験することができ、旭川高専の技術職員が持つ、より深い学生実験・実習に関する知識を学べたこと、また、本学には無い設備を用いた研修を受けることにより、今後の業務への参考になったという感想が聞かれました。

スキルアップだけではなく、両機関の連携を深める点でも大変有意義であったことから、両機関の受講者や関係者からは、次年度も研修を継続して欲しいとの声があり、本事業の目的に寄与できたことが伺えました。

（技術支援本部）



北大における研修（分析系）の様子



北大における研修（情報系）の様子



旭川高専における研修（工作系）の様子



旭川高専での閉講式の様子

第1回北海道大学コアファシリティシンポジウムを開催

1月18日（木）に技術支援・設備共用コアステーション（CoSMOS）の主催、創成研究機構グローバルファシリティセンター（GFC）及び技術支援本部の協賛で、国が進める共用事業の最新情報の共有を目的とした第1回北海道大学コアファシリティシンポジウムを札幌市中央区のアスティ45で開催しました。ハイブリッド形式で開催した本シンポジウムには現地51名、オンライン約190名の参加がありました。

はじめに増田隆夫理事・副学長による開会の挨拶があり、続いて文部科学省科学技術・学術政策局研究環境課の稲田剛毅課長から「研究設備・機器の共用に関する文部科学省の取組について」と題した基調講演を行っていただきました。その後、北大コアファシリティ機器共用機能強化プログラムの進捗報告として、CoSMOS研究基盤強化グループの佐々木隆太グループ長から機器共用に関する成果と今後の展開に

ついての報告を、北大コアファシリティ研究支援人材育成プログラム進捗報告として、岡 征子技術支援本部分析系・実験実習系グループ長/分析系ユニットリーダーから研究支援人材育成プログラムの「概要」の説明を、続いて各プロジェクトリーダーから、これまでの成果と進捗報告を行いました。更に、「GFC試作ソリューション事業の自立化に向けて」と題し、中村晃輔GFC試作ソリューション部門長から事業に関する報告を行ったあと、国立研究開発法人海洋研究開発機構超先鋭研究開発部門（高知コア研究所）の伊藤元雄調査役から「北大GFCとの連携が生み出した分析研究の好循環研究の力と技術の力」と題した講演を、メルボルン大学理学部国際共同研究サポートの下田実加氏から「メルボルン大学における研究支援体制と人材育成戦略～研究教育の現場から」と題した講演を行っていただきました。続いて、網塚 浩

GFCセンター長及び技術支援本部の井上 京副本部長から「北海道大学技術支援本部の現状と将来」と題して話題提供がなされ、その後のパネルディスカッションでは網塚GFCセンター長の進行のもと、稲田課長、下田氏、伊藤調査役、井上副本部長、岡分析系ユニットリーダーに加えて技術支援本部長の行松泰弘理事をパネリストに迎え「大学における研究支援体制と人材育成戦略」をテーマに活発な討論が行われました。最後に、行松理事による挨拶で閉会となりました。

閉会後に実施したアンケートの回答によると、コアファシリティ事業に関する報告をはじめ、各報告に多くの反響があり、本シンポジウムが今後の各機関における取り組みの参考となることが期待されます。

（創成研究機構）



増田理事・副学長による開会の辞



シンポジウム会場の様子



パネルディスカッションの様子

第7回化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）国際シンポジウムを開催

創成研究機構化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD／アイクレッド。以下、「ICReDD」）では、1月18日（木）、19日（金）の2日間、“The Rising Star Program”として第7回国際シンポジウムをICReDD棟でハイブリッド形式により開催しました。“The Rising Star Program”は、ICReDDの若手主任研究者（Jr. PI／ジュニア・ピーアイ）が企画・運営をする初の国際シンポジウムです。

シンポジウムは講演とポスターセッ

ションにより構成され、国内外からの招待講演者8名、ICReDDから5名の総勢13名により、ICReDDの主要研究分野である計算（理論）科学、情報科学、実験科学の三つの分野の講演を行いました。

シンポジウムへの参加人数は165名（対面100名、オンライン65名）、加えて、初日に行われたポスターセッションでは、22名によるポスター発表が行われたこともあり、2日間を通して日本のみならず世界各地からの参加者同

士が積極的な議論・意見交換を行う姿が見られました。

ICReDDでは今後もこのような国際シンポジウムを開催し、ICReDDにおける研究を世界へ発信するとともに、若手研究者の研究交流と活躍の場を設け、将来的な異分野融合研究の萌芽と展開を目指していきます。

（創成研究機構化学反応創成研究拠点（ICReDD））

講演者一覧

1月18日（木）

- ・ David Bryce (University of Ottawa, Canada)
- ・ Koji Kubota (WPI-ICReDD, Hokkaido University)
- ・ Nobuhiro Yanai (Kyusyu University)
- ・ Midori Akiyama (Kyoto University)
- ・ Yu Harabuchi (WPI-ICReDD, Hokkaido University)
- ・ Ruben Staub (WPI-ICReDD, Hokkaido University)
- ・ Nong Artrith (Utrecht University, Netherland)
- ・ （ポスターセッション）

1月19日（金）

- ・ Julia Kalow (Northwestern University, USA)
- ・ Nobuya Tsuji (WPI-ICReDD, Hokkaido University)
- ・ Yoichi Hoshimoto (Osaka University)
- ・ Ramil Nugmanov (Johnson & Johnson Innovative Medicine, Belgium)
- ・ Pinku Nath (WPI-ICReDD, Hokkaido University)
- ・ Philippe Schwaller (Ecole Polytechnique Fédérale de Lausanne, Switzerland)



講演者とJr. PI



講演の様子



ポスターセッションの様子

モンゴル・ウランバートルにて開催されたDXビジネスコンテスト「DXCUP2024」に本学学生が参加

12月9日（土）にモンゴル・ウランバートルにて開催されたDXビジネスコンテスト「DXCUP 2024」に本学学生が参加しました。DXCUP2024はモンゴルのDX普及・ICT・デジタル工学系人材の育成を目的として開催されました。モンゴルの社会課題解決に資する、DX技術を用いたビジネスプランを全国から募集した結果、約60チームの応募があり、13チームが本選に出場しました。日本からは4チームが本選に出場しており、そのうち3チームが北海道からの出場となりました。審査の結果優勝チームはAI技術を活用した家畜のモニタリングを提案したモンゴル高専の学生チームとなりましたが、日本から参加したチームも健闘し

ました。終了後は日本・モンゴル両国の学生の交流会が開かれ、モンゴルの社会課題解決に向けて活発な議論が行われました。

本学から出場したチームの1つは、AIを活用したアントレプレナーシップを学べるビジネスゲーム「チャレンジピッツァ」を提案しました。本アイデアにより、人手不足を課題とする地方において、質の高いアントレプレナーシップ教育を展開することができます。また、ゲームデータを記録・分析することで、教育効果の測定と研究に役立てることを目指しています。残念ながら本アイデアは入賞とはなりませんが、現地の教育関係者が非常に興味を持ってくださいました。

参加した学生からは「現地のニーズに合う商品・サービスを考えるのが難しかった」「海外でもやっていけるという手応えを感じた」という感想が寄せられました。また同席した教員も学生の海外チャレンジに手応えを感じており、「引き続き、学生が自らのアイデアを海外に展開できる機会を増やしていきたい」と語っていました。

今回はJICA様の多大なる協力のもと、このような機会をいただくことができました。産学・地域協働推進機構では、今後も学生のアントレプレナーシップ涵養に貢献すべく、このような事業を実施していきます。

（産学・地域協働推進機構）



北海道チーム1の発表の様子



北海道チーム2の発表の様子



杉村逸郎特任教授が登壇したトークセッション



会場の前で全体写真

スポーツ×アントレプレナーシップ教育 野球教室を長沼町で開催

産学・地域協働推進機構ではアントレプレナーシップ教育を幅広い地域で提供することを目的に、スポーツとアントレプレナーシップを掛け合わせたプログラムを実施しています。12月14日（木）に、前回のスポーツ×アントレプレナーシップ教室でもご好評いただいた長沼町で野球教室を開催しました。長沼町野球クラブの子どもたち19名が参加し、本学職員と競技経験のある本学学生がタッグを組み指導にあたりました。

本プログラムは、単なるスポーツ教室ではなく、アントレプレナーシップにおいて重要とされるチームワークや

リーダーシップ、そして失敗しても諦めずに努力することの大切さを、スポーツを通じて理解することを目的としています。今回参加した子どもたちにもまた、野球の基礎練習を楽しむと同時にアントレプレナーシップの考え方を学んでいただきました。

イベント終了後に実施したアンケートからは、本イベントを通じて、他者との協働や自己効力感を持つことの大切さについて学びを得られたという感想や、個人に対する細やかな声かけや褒めることで、自己肯定感が向上し前向きな姿勢にさせることができたという感想が寄せられ、本イベントの目的

を十分に達成することができたと考えます。

更に保護者からは、「普段指導している大人より年齢が近いため、とても楽しく参加できていたと思います」、「田舎にはこういった様々な刺激や教育機会が乏しいので、非常にありがたい機会でした」という前向きなご意見をいただきました。産学・地域協働推進機構では、アントレプレナーシップの醸成のため、今後も新たな取組みを企画していきます。

（産学・地域協働推進機構）



アントレプレナーシップのレクチャーをしている様子



チームワークを高めるワークショップの様子



大学生が指導にあたる様子



全体集合写真

「アントレまちなか留学」： 異文化共生とアントレプレナーシップを促進する取組みを実施

産学・地域協働推進機構では、1月8日（月・祝）～1月11日（木）にかけてHelloWorld株式会社、北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク（HSFC）と協働し「アントレまちなか留学」を開催しました。

本イベントは、北海道内の高校生を対象に、沖縄在住の外国人家庭にホームステイをしながら、様々なワークショップに参加するプログラムです。ホームステイは、海外留学でなければ得られにくい、異文化や国際コミュニケーションを学ぶために設けています。ワークショップは、企画側から出題する実践的な設問について参加者同士が意見交換を行うことで、アイデアの創造、アントレプレナーシップ、

SDGsや多文化共生の考えを学ぶことができるように企画しています。更に、地域社会で活躍する社会人の講話を聴講する機会を設け、高校生がこれからの進路やキャリアを考える機会も同時に提供しています。

本イベントには、全道各地から定員25名を大きく上回る100名から申し込みがあり、選考の結果、高校生・高専生25名（18校）が参加しました。

イベント後の参加者アンケートにおいて、ほぼ全ての参加者から、「積極性や挑戦することの大切さを感じた」、「海外志向が向上した」という意見が得られ、高校生たちの意識に変化を与えることができたと考えます。加えて、「高校生の内に海外留学をする」

「他のアントレプレナーシップ教育プログラムに参加したい」「アントレプレナーシップワークショップで考えたアイデアを実現するために行動を起こす」など前向きな意見が多く寄せられました。

今回は初めての取り組みとなりましたが、多くの協賛・後援の皆様にも支えられ、盛会の内に終了することができました。産学・地域協働推進機構では、今後も地域学生のアントレプレナーシップ涵養に貢献すべく、このような機会を実施していきます。

（産学・地域協働推進機構）



ホームステイの様子



多文化共生ワークショップの様子



アントレプレナーシップワークショップの様子



全体集合写真

「支援機関向け知財ナレッジ強化研修」及び「学内向け利益相反セミナー」を開催

1月15日（月）～16日（火）までの2日間、北海道大学、STARTUP HOKKAIDO、北海道知的財産戦略本部及び北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク（HSFC）は、「支援機関向け知財ナレッジ研修」を共催し、HSFC参画機関を中心に、道内の6つの大学等が参加しました。本研修では、特許庁や大学及び法律事務所等の産学官から知財専門家をお招きし、支援機関向けに知財戦略の知識や事業会社目線での協業・オープンイノベーションの考え方、実務・現場レベルでの事業成長サポートに必要な知

識・ノウハウなどを集中的に学ぶ機会を提供しました。さらに2日目午後のワークショップでは、参加者はグループに分かれ、講師から出題された実践的な題材について活発に意見を出し合いました。

また、1月17日（水）に、「学内向け利益相反セミナー」をFMI（Food & Medical Innovation）国際拠点で実施しました。本セミナーでは、知財専門弁護士による、利益相反（研究者が兼業して事業化する場合の留意点等）の概要・事例についての講演とケースディスカッションを実施しました。学

内の関係者41名が出席し、活発な質疑応答や対話が行われました。

このような知財起点の産学官連携研修及びセミナーは、大学の研究成果を基にした更なるスタートアップの創出や成長支援、また特許ライセンス契約の促進に大いに寄与するものであり、参加者の皆様からも満足度の高い声が寄せられたことから、今後も継続的に実施していきたいと考えています。

（産学・地域協働推進機構）



「支援機関向け知財ナレッジ強化研修」講義の様子



「支援機関向け知財ナレッジ強化研修」ワークショップの様子



「利益相反セミナー」講義の様子



「利益相反セミナー」ワークショップの様子

「2024年北海道大学・マサチューセッツ大学アマースト校 高分子工学にかかるバーチャルシンポジウム」を開催

北海道大学は全学的な研究連携強化を図っている米国マサチューセッツ大学アマースト校（UMass Amherst, 以下、「UMA」）と、1月31日（水）に「2024年北海道大学・マサチューセッツ大学アマースト校高分子工学にかかるバーチャルシンポジウム」を開催しました。北海道大学とUMAは、札幌農学校、マサチューセッツ農学校の時代から長く連携関係にあります。近年の研究者のジョイントアポイントメントや共同研究を経て、2023年4月には総長一行がUMAを訪問し、戦略的国際連携パートナーとして全学的な連携強化に合意しました。本イベントは、両校の強みのある分野の一つ、高分子工学をテーマにオンラインで連携促進にかかるキックオフイベントとして開催されました。

本シンポジウムは、本学の高橋 彩 理事・副学長の司会、UMAのカルペン・トリヴェディ国際担当副プロボス

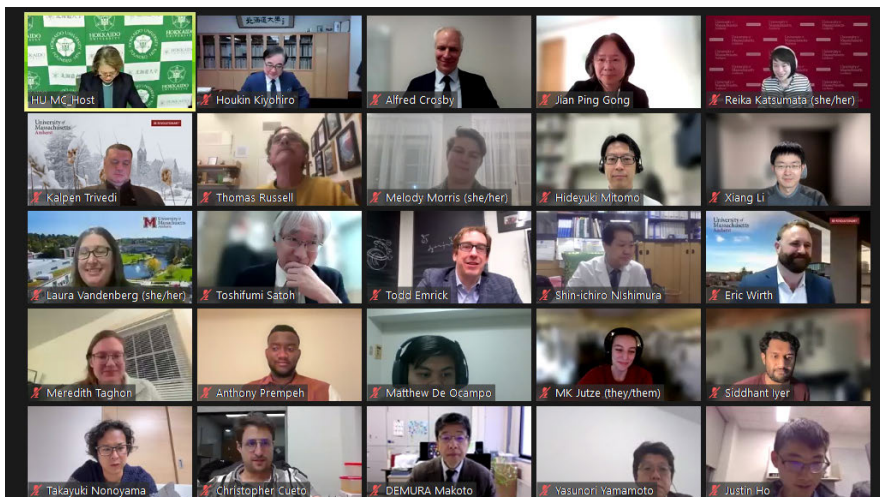
ト、寶金清博総長による両校連携の振り返りによって始まりました。UMAのハビエル・レイス学長からは、着任して間も無いながらも150年近く前から姉妹校関係に感銘を受けていることと、本学が過日採択された文部科学省「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」への期待が込められたビデオメッセージが届きました。また、同分野で長年連携の礎となっている、先端生命科学研究院のグン・チェンピン教授、高分子工学科のアルフレッド・クロスピー学科長・教授による研究室レベルでの若手人材交流の紹介と今後の展望を踏まえた挨拶がありました。

研究ショーケースとしたセッションでは、工学研究院の佐藤敏文教授、先端生命科学研究院の西村紳一郎教授とシャン・リ准教授、電子科学研究所の三友秀之准教授、UMA高分子工学科のトッド・エムリック教授、勝又麗香助教、メロディ・モリス助教、ス

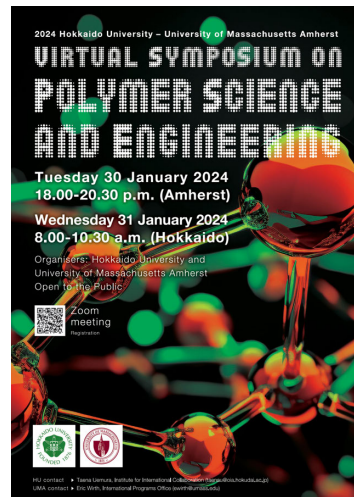
ティーブ・グラニック教授と、両校より8名の研究者から研究活動の紹介があり、学生や若手研究者へのエールと共同研究の可能性が提示されました。

新規共同研究と学生の研究インターンシップが増えることへの想い、両校連携は人と人の繋がりでの積み重ねであることが、増田隆夫理事・副学長とローラ・ヴァンデンバーグ研究担当理事代行から改めて強調され、2時間半のイベントは幕を閉じました。参加者約90名には、両校のみならず、ミシガン大学、スタヴァンゲル大学、ボゴール農科大学、チュラロンコン大学、南ミナナオ大学、フィリピン科学技術局、大阪大学からの参加もあり、高分子工学分野への関心の高さをうかがわせました。

（国際連携機構）



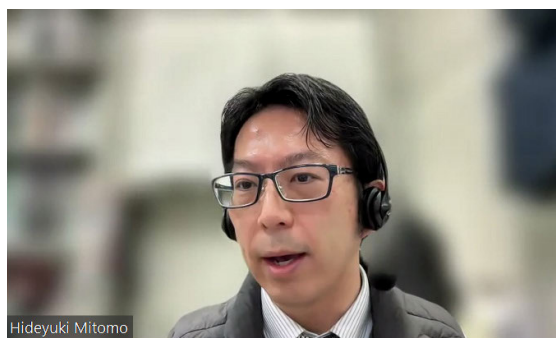
参加者一同



フライヤー



ヴァンデンバーグ研究担当理事代行



電子科学研究所の三友准教授

エコサイエンス体感イベント 「カーボンクエスト 炭素になって、さあ冒険だ！」を開催

サステナビリティ推進機構と本学発スタートアップ企業の合同会社エゾリンクは、子ども環境情報誌エコチルの協力のもと、11月23日（木・祝）にエコサイエンス体感イベント「カーボンクエスト 炭素になって、さあ冒険だ！」を開催しました。

「カーボンクエスト」は、炭素循環の仕組みを理解することを通じて、気候変動問題を考えることを目的に、エゾリンクが開発したプログラムです。

当日は、小学校4年生から6年生の子どもとその保護者、20組46名の方々の参加がありました。はじめに、総合博

物館「知の交流ホール」に集合し、「ちょっとお茶目なテオ博士」に扮したエゾリンクの権 台五さんと、同社の風張喜子さんの掛け合いによる、二酸化炭素発生の科学実験を見学し、続いてエルムの森に移動し、樹木の間を巡るウォークラリー形式のクエスト（探索）を行い、炭素循環の仕組みを体験しながら楽しく学びました。

屋内と屋外を使った体験型のイベントは、大人も子どもも両方が楽しく学べたとして好評の声が参加者からあがり、イベント後に実施したアンケート（回収率65%）からも、気候変

動についての興味喚起、発信、主体的な学びのきっかけ作りに繋がったことが分かりました。

また、当日の様子は12月19日（火）にNHK総合テレビで放送された0755DDチャンネルの「科学と世の中をつなぐ～ポストクチームの挑戦～」などでも紹介されました。

サステナビリティ推進機構は、今後も子ども達への学習機会の提供を通して、持続可能な社会づくりに貢献していきます。

（サステナビリティ推進機構）



テオ博士に扮した権さんと助手役の風張さん



総合博物館「知の交流ホール」での参加者の様子



エルムの森でのクエストの様子



木々に掲示された指示書を読み込む参加者

国連大学チリツィ・マルワラ学長が表敬訪問 特別講演を実施

国際連合大学（国連大学）のチリツィ・マルワラ学長が、国連大学サステナビリティ高等研究所の山口しのぶ所長、及び同研究所大学院プログラム事務局の堀尾多香事務局長とともに、1月25日（木）から26日（金）に、本学を表敬訪問されました。

1月25日（木）にマルワラ学長は、サステナビリティ推進機構と国際連携機構の主催による特別講演会で講演を行いました。

講演会は、学术交流会館での対面参加とYouTubeによるライブ配信で行われ、農学研究院の岩淵和則総長補佐・教授の司会で進行しました。

「AI and Its Governance」と題した講演の中でマルワラ学長は、これまでに発表した数多くの著作物を紹介しながら、AIが前例のないスピードで発展する中、このテクノロジーを公益のために活用するには、人権、倫理的枠組

み、ガバナンスへの配慮、国内及び国家間の不平等による影響、潜在的な差別、さらには民主主義や政治的安定への影響に慎重な注意を払う必要があること等を英語で講演しました。

その後、山口所長がマルワラ学長の講演の概要と講演に対するコメントを日本語で説明等を行い、最後に会場参加者からの質問等に対応し、特別講演会は終了しました。

講演会には、本学の学部学生・大学院生、教職員等約100人が会場参加とライブ配信の視聴により参加しました。

続く1月26日（金）には、マルワラ学長一行が寶金清博総長を表敬訪問しました。寶金総長が歓迎の挨拶を行った後、高橋 彩理事・副学長が、国際連携研究教育局（GI-CoRE）、創成研究機構化学反応創成研究拠点（ICReDD）の紹介や、本学の国際連携による研究教育について説明を行い、続いて

横田 篤理事・副学長がHU VISION 2030、SDGs達成に貢献する取組推進の体制やサステナビリティに関する研究・教育について紹介しました。

また、マルワラ学長一行は、この度の本学訪問の間に、情報科学研究院の長谷山美紀研究院長をはじめとした研究者とのAIや半導体に関する意見交換や、農学研究院の野口 伸研究院長の案内によるスマート農業教育研究センターの視察及び総合博物館の江田真毅教授の案内による総合博物館の視察を行いました。

サステナビリティ推進機構と国際連携機構は、今後も「持続可能な社会」の実現に繋がる教育・研究の取組・発信を進めていく予定です。

（サステナビリティ推進機構、国際連携機構）



表敬訪問の集合写真（左から5番目がマルワラ学長）



講演を行うマルワラ学長



概要とコメントを述べる山口所長



会場参加学生らとの集合写真

大学院生向けプレゼンテーションスライドセミナーTips for designing your presentations: What I learned from scientists abroadを英語で開催

大学院教育推進機構先端人材育成センターI-HoPは、1月19日（金）に大学院生を対象とした英語によるスライド作成セミナー「Tips for designing your presentations: What I learned from scientists abroad」をオンラインで開催しました。

研究者にとって、研究内容を相手に分かりやすく伝えるためのスライド作成スキルは必須であり、日本人学生、留学生ともに、継続的な学習やトレーニングの機会が求められています。

当日は、ドイツのマックスプランク老化学研究所Postdoctoral research fellow大西真駿氏を講師に迎え、プレ

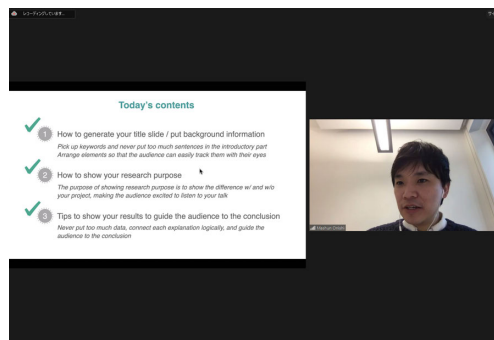
ゼンテーションスライド作成の考え方や手法についての説明と、学生から事前提出されたスライドへのフィードバックが行われました。

博士人材育成コンソーシアムの連携大学を含む全国4大学（北海道大学、東北大学、筑波大学、新潟大学）から計21名が参加し、終了後のアンケートでは「驚くほど有益でよく構成されたセミナーだった。ハイレベルで簡潔で分かりやすいプレゼンテーションスライドを作成するための新しいアイデアを得ることができた」「良いアカデミックプレゼンテーションの方法について多くの学びを得た」等のコメントが

寄せられました。

本学は第4期中期目標・中期計画に基づく大学院改革のうち、キャリア支援に関して、「学部から博士までの一貫したキャリア教育の強化」を掲げており、I-HoPはそのうちの大学院生向け英語によるキャリア支援プログラムを担当しています。従来留学生向けに開発されたスキルアッププログラムを日本人学生にも展開することで、多様なキャリアパスを広げるためのスキルアップの機会を提供しています。

（大学院教育推進機構先端人材育成センター）



講演の様子

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 8名の研究者が講義を実施

「非対称な世界、非対称な物質」 理学研究院 教授 吉田紘行

私たちの身のまわりには、磁石や超伝導体など、物質の中の電子状態が方向性を持つ（非対称になる）と機能性が現れるものがあります。吉田教授は、こうした物質の対称・非対称が生み出す現象について、自作のピタゴラ装置の映像等を交えて紹介しました。

周期表から元素を選び出し、化学的な手法で新しい物質の合成を行っている吉田教授。講義の後半では、より高い温度で超伝導体になる物質の発見を目指す自身の研究内容について解説しました。



物質の非対称性について解説する吉田教授

「環境と子どもの精神神経発達との関連：北海道スタディの知見から」 環境健康科学研究教育センター 特任講師 山崎圭子

生理心理学を専門とする山崎特任講師は、「北海道スタディ」を通して見られた、農薬やダイオキシンと子どもの発達との関連について説明しました。「北海道スタディ」とは、胎児期から出生後に至るまでの様々な環境と子どもの健康の関係性を明らかにする

研究です。この研究結果について、山崎特任講師は実際に得られた数値などを見せながら、胎児期に母親の血中に含まれる化学物質の濃度と思春期以降の注意機能との間に関連がある可能性が示されたことを解説しました。



北海道スタディについて解説する山崎特任講師

「漸化式を使って様々な現象を数式にしてみよう」 電子科学研究所 教授 長山雅晴

自然現象や生命現象など、理解したことを数式で表現する「数理モデリング」の研究をしている長山教授。これまでに様々な研究分野の研究者と協力して、人の体内の血糖値を予測して病気を未然に防ぐための数理モデルへの挑戦など、数学が社会の様々な課題解決の手段として使われていることを

紹介しました。高校で習う漸化式を使った数理モデリングの例として、ろうそくの炎の振動やメトロノームの共振を挙げ、計算結果が実際の現象と合うことを示しました。また、漸化式を使えば感染症の流行を予測することもできるといい、世の中に役立つ数学の魅力について語りました。



生徒たちへ数理モデルについて解説する長山教授

日 時：2023年12月8日（金）14：00－16：00

会 場：北海道旭川東高等学校

参加生徒：1－3年生 約90名

「ロボットの速度限界へ」 情報科学研究院 准教授 妹尾 拓

日進月歩のロボット技術。特に妹尾准教授が力を入れる「超高速ロボット」は、1/1000秒の速さで物体の動きを捉え、不規則に飛んでくるボールをキャッチしたり、動動的にボールを投げたりすることができます。ロボット

の感覚・処理系と運動系の両方を極限まで高速化し、新たなロボット世界の可能性を切り拓こうとしています。講義の後は研究室を訪問し、実際のロボットを見学したり、バーチャル・リアリティなどを体験しました。



研究室を訪問した生徒たちへ画面を見せて解説する妹尾准教授

日時：2023年12月11日（月）13：30－14：30

会場：情報科学研究院棟

参加生徒：札幌龍谷学園高等学校 1-2年生 15名

「ナノテクノロジーが拓く新しい電池」 理学研究院 准教授 小林弘明

私たちの生活に欠かせないリチウムイオン電池。理学研究院の小林准教授は、その開発の歴史やエネルギーを取り出す仕組みについて解説しました。そのうえで、より安全で高性能な電池が求められていると話し、次世代電池の開発について、自身が取り組んでいる研究を紹介。リチウムに代わる元素を用いるにあたり、解決しなければな

らない課題への様々なアプローチを説明しました。小林准教授は、新しい電池を作るには新しい材料を作り出す必要があります、さらに、その作り方も開発しなければならないと話し、そのためには中学高校からの知識の積み重ねが重要であること、また、夢を大きく持つことが大切だと生徒たちに伝えました。



リチウムイオン電池の開発について解説する小林准教授

日時：2023年12月18日（月）15：50－17：20

会場：北海道札幌北高等学校

参加生徒：1-2年生 10名

「未来社会を考える」 大学院教育推進機構 教授 宮本 淳

大学院の教育について考える高等教育学を専門としている宮本教授は、小学生から高校生までを対象に大学研究の重要性やおもしろさを伝える取り組みをしています。今回の講義では、2人の大学院生を迎え、大学進学までの経緯や研究について話す場を設けました。農業か宇宙の研究を行いたくて北大を目指したという農学院博士後期課程1年の藤木卓巳さんと、何がしたいかわからないけれど、あとで見つけようと考えて北大に入学した文学院博士

後期課程2年の白井那奈さん。異なる入学経緯を持つ2人ですが、選択肢を広く持ちながら、好きという思いや、やりたいという欲求を大切に、それに従って進む道を選んできたと話しました。続いて行われたフリートークでは、宮本教授と大学院生が生徒たちと和やかな雰囲気でお話しました。最後に宮本教授は、挑戦し続けることの重要性を生徒たちに伝え、講義を終えました。



生徒たちに問いかけながら授業を進める宮本教授

日時：2023年12月22日（金）10：00－12：00

会場：農学部本館

参加生徒：北海道小樽潮陵高等学校 2年生 23名

「有機化合物の常識を打ち破る～世界一への挑戦～」 理学研究院 准教授 石垣侑祐

生物の体を形作るだけでなく、プラスチックや液晶画面、半導体など私たちの生活に欠かせない物質である有機化合物の研究をしている石垣准教授。有機化合物は炭素を必ず含んでおり、炭素同士の結合の長さは基本的に決まった値を示すことが知られていましたが、石垣准教授の研究グループは世界で初めて、通常より17%も長い炭素結

合をもつ有機化合物の合成に成功すると解説しました。研究成果は大学院生が使う教科書にも掲載され、「研究成果がすぐに何かの役に立つかは分からないが、教科書の常識を塗り替えるような発見ができた」と話し、研究で世界一を目指すことの魅力について語りました。



有機化合物について解説する石垣准教授

日 時：2023年12月22日（金）10：00－12：00

会 場：理学部6号館

参加生徒：北海道小樽潮陵高等学校 2年生 10名

「ロボットとコンピュータによる化学空間探索」 創成研究機構化学反応創成研究拠点 特任准教授 原 潤 祐

12月22日（金）、北海高校の生徒15名が創成研究機構化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）を訪れました。ICReDDでは、計算科学、情報科学、実験科学の3分野を融合し、新しい化学反応の深い理解と効率的な開発を目指して研究を進めています。講義では、原潤特任准教授が、量子化学計算によって新たな反応経路を探索する方法を説明しました。「超えなければいけないエネルギーの山が低いほど反応は起

こりやすい」というルールに従い、最短の反応経路を当てるクイズを生徒たちは楽しんでいる様子でした。続く実験室の見学では、長田裕也特任准教授がロボットを使った自動実験について説明しました。実際に、「鈴木-宮浦クロスカップリング反応」についてロボットを用いた演示実験を行い、自動実験によってわずか10分程度で蛍光分子を合成する様子に生徒たちは驚いていました。



量子化学計算について解説する原潤特任准教授

日 時：2023年12月22日（金）16：30－17：30

会 場：化学反応創成研究拠点

参加生徒：北海高等学校 1-2年生 15名

アカデミックファンタジスタとは？

北海道大学の研究者が知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業、「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度は北海道の高校等を対象に31名の教員が講義を実施しています。

北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、Facebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ

<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/>

・Facebook

@Hokkaido.univ.taiwa

(広報・社会連携本部)



リサーチタイムズ



フェイスブック

■ 部局ニュース

歯学部でソウル大学校とのジョイントシンポジウム分科会を開催

歯学部において、1月5日（金）に、第26回北海道大学-ソウル大学校ジョイントシンポジウムの分科会を開催しました。本分科会は通算で6回目であり、ソウル大学校から、クォンホビョン歯学部長・教授をはじめ6名の教員が来学され、本学の教員、研究者、大学院生が約40名参加しました。

今回は、議題を「Future Directions

of Education in Dentistry」として開催しました。両校における若手研究者の研究内容や、現存する診断基準法とその問題点、AIを用いた歯学における診断法の開発、そして、疫学研究や診断における国際協働としての新しい分野の開拓について紹介があり、それらを活かした今後の歯学教育への応用について活発な議論が行われました。

分科会終了後に行われた懇親会では、両校における共同研究等について意見交換が行われ、今後も継続して更なる交流を深め、両校の歯学教育、共同研究が推進されることが期待されます。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）



参加者記念撮影



シンポジウムの様子

FD研修「工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センター安全保障輸出管理FD研修会」を開催

工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センターは、1月12日（金）、産学・地域協働推進機構の大林明彦教授を講師にお招きして、安全保障輸出管理FD研修会を開催しました。

多様なパートナーとの国際共同研究や、研究者・学生の交流拡大による国際化の進展により、安全保障に関連する技術の流出の懸念がますます高まっている中、大学における安全保障輸出

管理体制等のあり方についての理解を深めることを目的として開催しました。

研修会はオンライン形式で行われ、工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センターの教職員約90名が参加しました。

当日は、大林教授から安全保障輸出管理総論、米国再輸出規制、みなし輸出管理明確化についてご説明いただき、特に、「技術の提供」に関しては日々の教育・研究活動で対象となる具

体的な事例の紹介もあり、参加者にとって大変有意義な研修会となりました。

なお、当日参加できなかった教職員向けに、動画収録した研修会の様子はe-ラーニング教材として後日視聴ができるようにしています。

（工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センター）



講演する大林教授

メディア・コミュニケーション研究院が「メディア・ジェンダー・教育と日中関係」で公開講座

メディア・コミュニケーション研究院は1月20日（土）、「メディア・ジェンダー・教育、『日中関係の多様性』を考える」と題した公開講座を、高等教育推進機構で開催し、約130人（会場約70人、オンライン約60人）が参加しました。昨年3月から日本に滞在し、日本観察を続ける中国の知的インフルエンサー・李一諾（リー・イーヌオ）氏（「一土教育」共同創業者）が基調講演を行いました。政治問題で対立する日中関係ですが、メディアやジェンダー、教育の分野で両国の民間同士が連携し、多様な関係を構築することの大切さを共有しました。

ビル・ゲイツ財団中国代表などの経歴を持つ李氏は、中国で学校を開設し、草の根教育を展開するとともに、オンラインコミュニティやSNSチャンネルを開設し、フォロワーは230万人を

超えています。2021年『フォーブス』誌の「2020年中国で最も影響力のあるビジネスウーマン」にも選ばれました。3人の子供の母親でもあります。

基調講演では、日本で過熱する中学受験などを観察し、日本と中国の教育は、テストで全てが決まり、点数で「淘汰」や「選別」が行われていると、両国の教育の未来に懸念を示しました。また、中国国内ではメディアを通じて、何が起きているかを理解するのがより難しくなる一方、日本では大学院で中国研究を行う日本人がますます減り、「両国間で相手国の真実を理解するのは難しくなり、両国民の感情の離反や対立を招いている」と訴えました。

その一方で、東京などに滞在する中国の民間知識人が、東京大学で中国問題に関する講座を開いたり、中国語図

書を扱う新たな書店が開店したりするなど、「中国理解」に向けた新たな動きが日中の民間レベルで盛り上がっていると指摘。「特に教育とジェンダーに関するテーマは、自由や平等に向けた中心的なテーマであり、声を上げて推し進める必要がある」と期待感を示しました。

メディア・ジェンダー・教育は、本研究院や国際広報メディア・観光学院で研究や教育が盛んな分野であり、公開講座には、こうした分野の研究を行う中国人留学生も多く参加し、質問するなど活発な意見交換が行われました。本公開講座の通訳と総括は東京大学大学院総合文化研究科の阿古智子教授が行い、本研究院の城山英巳教授が企画と司会を担当しました。

（メディア・コミュニケーション研究院）



公開講座で基調講演する李氏

スラブ・ユーラシア研究センターでメルボルン大学との ジョイントセミナーを開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、1月12日（金）に北海道大学—メルボルン大学ジョイントセミナー“Eurasian Migration. Past, Present and Future”を開催しました。本セミナーは、北海道大学とメルボルン大学が国際研究連携深化のために、新規研究テーマと異分野融合研究の可能性を探る合同コンファレンスの開催、博士課程学生の共同指導の更なる促進、そして新規研究連携を支援する合同研究ワークショップファンドを立ちあげ、その2023年度採択ワークショップとして催されたものです。

また、このジョイントセミナーは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトのグローバル地域研究推進事業「東ユーラシア研究プロジェクト」（以下、

「EES」）における四拠点の一つ（他に東北大学、国立民族学博物館、神戸大学）として、「文化衝突とウェルビーイング」、とりわけ「越境とジェンダー」を中心テーマとする研究事業との共催でもありました。

メルボルン大学側からは博士候補者を含む6名、北海道大学側（主にEES北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点メンバー）からは7名が参加し、過去、現在、未来における「移動」を軸に活発な議論を行いました。ロシアによるウクライナ侵攻という今般の世界情勢を踏まえ、ロシア帝国・ソ連西部国境地域に関する歴史研究の再構築、戦後冷戦秩序における移民難民問題など、多岐に渡るテーマをもとに、熱心なやり取りが交わされました。さらに、今後の共同研究のための

研究班の結成、来年度以降の研究発展計画の作成を話し合い、さらなる研究協力の拡大に繋がるとても有意義なワークショップとなりました。

セミナーに先立ち、メルボルン大学研究者らは本学附属図書館を訪問し、大型コレクションを見学し、附属図書館が世界に誇る大型コレクション、特にヴェルナツキー文庫、ボリス・スヴァーリンコレクション、ロシア亡命文学コレクション、ヘンリク・ゲルシンスキー旧蔵ポーランドコレクションなどに強い関心を寄せ、将来的な本学での長期在外研究についても相談を受けたほどでした。図書館ツアーにご協力いただいた附属図書館スタッフに感謝いたします。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



オープニングリマークスをする
メルボルン大学のマーク・エデーレ教授



セミナーでの議論の様子



セミナー参加者の集合写真

「森のたんけん隊2024冬」を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、道北の雨龍研究林（幌加内町）を舞台に、1月11日（木）～12日（金）の2日間、小学生向け野外プログラム「森のたんけん隊2024冬」を開催しました。幌加内町教育委員会及び名寄市北国博物館と共催した、毎年恒例のイベントです。

泊りがけの開催。大きな荷物をもって雨龍研究林に集合したのは計13名。幌加内町・名寄市のほか近隣の美深町の小学4～6年生で、昨年に引き続き参加してくれた顔も見えます。普段と違う友だちと会って一緒に遊べるのがこのプログラムの特長です。

お昼前に集合して、昼食をとったら森へ出発。前日からの強い雪はちょうど止んでくれました。スタッフが事前に準備したクイズ・課題ポイント7箇所を歩いて巡ります。ここで勉強するのは、木の種類や見分け方、木の高さや太さの測り方、森の中での方位や距離の測り方など様々。かんじきを履い

ても歩きにくいフカフカの新雪でしたが、走りだす子供もいて元気に終えることができました。

温かい部屋に戻って答え合わせをした後は、また外へ。雪のブロックを皆で加工して、秘密基地（イグルー）とそれを囲むスノーランタンを作ります。ランタンの光が映える時間まで雪あそびを楽しみました。おいしい夕飯を済ませたら次は「森のハンドメイド」。事前にスタッフが用意した木の枝や円盤に加えて、昼に各自が持ち帰った樹皮や葉も使って思い思いの工作を仕上げました。

翌日も良い天気。午前のプログラムは「宝さがし」です。雪上車で到着した深い天然林。2班に分かれ、雪の中深く埋められた宝箱を目指しました。スタッフが用意したヒントは「南東に30m進んだところにある、直径が50cm以上のドングリがなる木」といったように、昨日のクイズや課題で得た知識を活かさなければなりません。どちら

に進むか、チームワークも必要です。戻るとお昼は、野外で「雪原パーティ」です。火を囲んで暖かい食事をとった後には、アイスクリームづくりやスノーモービルの試乗体験も楽しみました。

プログラムの運営は、研究林の教員・技術及び事務スタッフと、共催している教育委員会・博物館の職員が共同で行っています。多様なスタッフがそれぞれの経験や知識を活かすことで、プログラムの質を高めてきました。冬山での活動になりますし、親の付き添いなしでの宿泊も伴うので、安全・健康面には細心の注意を払っており、今回も無事に開催できたことが何よりです。イベントを通して地域の中での繋がりが深まることもこのプログラムの大きな意義となっています。今後も、こうしたイベントを通して、森の多様性や人と森との関わりを子供たちに伝えていきたいと考えています。

（北方生物圏フィールド科学センター）



この木の名前は？



イグルーづくり



森のハンドメイド



宝探し

北方生物圏フィールド科学センターと様似町が包括連携協定を再締結

北方生物圏フィールド科学センターと様似町は、学術、教育、文化及び地域の発展に関する各分野の協力関係を深め、双方の発展と充実に寄与することを目的として平成23年3月に包括連携協定を締結していますが、このたび、同町にあるアポイ岳に関する諸活動の実施を連携・交流事項に追加することを目的として、1月16日（火）付けで同協定の再締結を行いました。

様似町にあるアポイ岳は、平成14年に「日本ジオパーク」に認定され、平成27年には「ユネスコ世界ジオパーク」に加盟しています。

ジオパークとは、地質学的重要性を有するサイトや景観が、保護・教育・持続可能な開発により一体となった概念に基づき管理され、統合された地理的領域を示すものですが、アポイ岳及びその周辺の豊かな自然環境については、詳細が不明な事項が未だ多く存在します。今回の包括連携協定の再締結は、こうしたアポイ岳ジオパークにまつわる様々な事項に関する調査研究の実施や、途中経過を含めた活動の成果について、同町住民を始めとする多くの方々に還元することを目的とするものです。

1月25日（木）には、様似町の荒木輝明町長が北方生物圏フィールド科学センターを来訪され、今後の連携活動実施に関して、北方生物圏フィールド科学センターの宮下和士センター長と懇談されました。

様似町では、包括連携協定の再締結に伴う奨励研究事業や本センター教員による講演会等の実施を予定しており、今後の北方生物圏フィールド科学センターと様似町とのより一層の交流活動の進展が期待されます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



左から協定書を手にする荒木町長と宮下センター長

■お知らせ

過半数代表候補者の決定

札幌キャンパス事業場（病院を除く。）における過半数代表候補者は、以下のとおり決定いたしました。

※ 立候補者の記載は届出順。

（総務企画部人事課厚生労務室）

職種・系区分		過半数代表候補者		
教 員	文 系	（教育学研究院）	川 田 学	
	理 系	理 学 研 究 院	（理学研究院）	小 亀 一 弘
		工学研究院・情報科学研究院	（工学研究院）	山 形 定
		上 記 以 外 の 理 系	（農学研究院）	清水池 義 治
	医 系	（医学研究院）	柏 木 彩 花	
附 置 研 究 所 ・ 研 究 セ ン タ ー 系	（低温科学研究所）	関 宰		
職 員 （ 教 員 を 除 く ）		（総務企画部）	長谷川 修 平	
		（国際部）	寺 澤 惇	
		（医学系事務部）	江 崎 公 二	
特任教員・契約・短時間勤務・嘱託職員		（スラブ・ユーラシア研究センター）	中 嶋 奏 子	
		（学務部）	岩 松 正 一	

■表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
6.1.16	駐日ウズベキスタン共和国大使館 Mukhsinkhuja Abdurakhmonov 特命全権大使	今後の交流に関する懇談
6.1.22	北海道大学バングラデシュ同窓会 Md. Tofazzal Islam 会長	今後の交流に関する懇談
6.1.26	国連大学 Tshildzi Marwala 学長	今後の交流に関する懇談及び講演会



Mukhsinkhuja Abdurakhmonov
駐日ウズベキスタン共和国大使（左から3人目）



Md. Tofazzal Islam 北海道大学バングラデシュ同窓会会長
（左から4人目）



Tshildzi Marwala 国連大学学長（中央）

（国際部国際連携課）

■人事

令和6年1月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 (辞職)	尾 崎 倫 孝	大学院保健科学研究院教授

令和6年2月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 情報基盤センター教授	梅 田 隆 行	名古屋大学准教授

新任教授紹介

令和6年2月1日付



情報基盤センター教授に

うめだ たかゆき
梅田 隆行 氏

スーパーコンピューティング研究部門

生 年

昭和51年

最終学歴

京都大学大学院情報学研究科博士後期課程修了（平成16年3月）

博士（情報学）（京都大学）

専門分野

計算科学、プラズマ物理学、宇宙空間物理学

訃報

名誉教授 かみや 神谷 まさお 正男 氏
(享年83歳)



名誉教授 神谷正男 先生が、令和6年1月23日にご逝去されました。

神谷先生は昭和15年に岡山県に生まれ、昭和41年北海道大学獣医学部獣医学科を卒業、昭和43年東京大学大学院農学系研究科修士課程修了後、東京大学医科学研究所研究生として研究に従事されました。同年から昭和46年までロンボ計画免疫学専門家としてタイ国立医科大学熱帯医学部に派遣され、帰国後昭和50年まで聖マリアンナ医科大学（病害動物教室）において助手として勤務されました。この間、昭和50

年に東京大学で医学博士を取得され、同年聖マリアンナ医科大学で講師に昇任、昭和51年には北海道大学獣医学部の助教授に任ぜられ、昭和63年からは同学部教授として寄生虫学講座を主宰、平成7年の大学院重点化に伴い北海道大学大学院獣医学研究科動物疾病制御学講座（寄生虫学教室）教授に配置換えとなりました。その間、学部及び大学院の教育・研究に尽力され、幾多の有能な人材を育成し、平成16年に定年により退官されるまで、本学の運営にご尽力されました。

同氏は、獣医寄生虫学の教育に従事するほか、主にエキノコックスを含むテニア科条虫の種間競合、代替終宿主モデル及び終宿主診断法の確立、駆虫薬入り餌撒布によるエキノコックス対策、さらには、広東住血線虫による好酸球性髄膜脳炎の免疫診断、免疫欠損動物を用いた寄生虫排除機構の解明、ムカシウサギ亜科動物の生態と宿主寄生体を指標とした系統発生学的研究、東南アジアを中心とする寄生虫の系統分類学的研究、中央アジアにおける寄

生虫の多様性とその維持機構などの分野において多数の原著及び総説等研究論文を内外の学術雑誌に発表されました。これらの研究は、昭和63年日本寄生虫学会賞（小泉賞）、平成14年日本農学賞、平成15年北海道新聞文化賞（科学技術賞）の荣誉に輝きました。

学内にあっては、国際交流委員会、学生部委員会、図書館委員会などの委員を歴任し、大学行政に寄与されました。学外にあっては、文部省学術審議会専門委員、農林水産省獣医事審議会委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門員などを歴任し、文部及び農林水産行政に寄与されました。学会活動においては、日本寄生虫学会理事、日本実験動物学会理事、日本獣医学会評議員などの役職を歴任し、学会の発展に寄与されました。

ここに謹んで神谷先生の学術研究発展と人材育成への貢献に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(獣医学院・獣医学研究院・獣医学部)

編集メモ

- 日本航空株式会社（以下「JAL」）から、今年も梅鉢をいただきました。JALは、福岡県の大宰府天満宮から北海道へ春の訪れを告げる使者「梅の親善使節」を輸送するサポートを行っていて、その輸送先の一つとして本学へ届いたものです。太宰府天満宮といえば、学問の神様と呼ばれる「菅原道真公」が祀られています。学生や研究者が日々学問に励んでいる本学にぴったりの縁起の良い贈り物ですね。ご対応いただいたJALの皆様、ありがとうございました。



JALから届いた「太宰府の梅」

- 3月4日（月）から、本学公式クラウドファンディングプロジェクト第5弾が新たに始まります。詳細について気になる方は、QRコードからご覧ください！

北海道大学クラウドファンディング
<https://readyfor.jp/pp/hokudai>



裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は「総合博物館」です。左右対称なレンガ造りは美しく重厚感があり、歴史を感じさせるものですね。札幌で雪まつりが開催されるこの時期は、多くの観光客が本学を訪れ、この日も総合博物館前で写真を撮る方がたくさんいらっしゃいました。本学を代表する施設の一つとして、次世代へと受け継いでいきたいですね。

キャンパス風景 47 総合博物館（北10条西8丁目）



北大時報 ② No.839 令和6年2月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>